

変革期における歯科医療サービスの戦略経営

独自性のある歯科衛生士教育システム開発での戦略的アプローチの適応性

M041649 小原 啓子

1. 研究の目標

歯科衛生士教育は今、変革期を迎えている。各校には、修業年限の延長やカリキュラムの大綱化、単位制の導入により、「独自性のあるカリキュラムの策定」が求められている。戦略経営の視点から変革状況を明確化することで、歯科衛生士教育システム開発を検証する

2. 歯科衛生士養成所の状況

全国全ての歯科衛生士養成校（以下、養成校）は、2010年までに修業年限を2年制から3年制以上へと移行しなければならない。その対応への柔軟性はなく、実施しないことは養成校の閉鎖を意味している。

3. 研究の方法

先駆的に変革を遂げた養成校5校のパイロット・スタディにより経験的に導き出された分析視座を設定し、全国調査（98校/141校：回答率69.5%）を行った。その分析視座とは、「変革期におけるビジョン（vision）の明確化」「カリキュラム・マネジメント（curriculum management）」「コア・コンピタンス（core competence）」である。平成15年度までに26校（26.5%）が3（4）年制に移行している。

4. 「独自性のあるカリキュラム策定」における3つの視座による分析

4-1 独自性のあるカリキュラム

パイロット・スタディで、各養成校は独自性が発揮できるカリキュラムの策定を行っていることが確認された。さらに、3年制移行校から提出を受けた学科課程から、新規参入科目を抽出し、歯科衛生士業務への対応と教育の成果時間によるカテゴリー分類とその実施度により、新たな教育は新規業務や教育の長期成果を期待する方向に動き、他の養成校にまねできない独

自性のあるカリキュラム策定が行われていることを明らかにした。

4-2 変革期におけるビジョンの明確化

パイロット・スタディにおいて、変革した養成校においてはビジョンが明確に示されていたが、全国調査においても同じ傾向が示された。加えて、変革した養成校では今までの歯科衛生士教育には存在しなかったビジョン要素において重要性が高くなっていることを確認した。

4-3 カリキュラム・マネジメント

パイロット・スタディで導き出された結果と同じく、外部環境と内部資源の把握の時期が一定化されていないために、この変革におけるカリキュラム・マネジメントのフレームワークを明確に固定化することは難しかった。したがって、各養成校で組み立てられる職能教育としての特色ある歯科衛生士教育は、広義のカリキュラム・マネジメントによるプロセスを踏んで策定されたと表現した。

4-4 コア・コンピタンス

パイロット・スタディにおいて、各養成校で組み立てられたカリキュラムは、各養成校のコア・コンピタンス生かされていたが、全国調査においては独自性のあるカリキュラムとコア・コンピタンスとの関係を明確にすることはできなかった。しかし、変革後の養成校では、組織としての資源や設置母体のブランド力をコア・コンピタンスとして上げる特徴が見られた。

5. 残された課題

この研究によって、変革期の歯科衛生士教育における「独自性のあるカリキュラム」の策定は、分析視座による分析によって、不十分な点を残しながらも明らかにできた。しかし、変革は2010年（平成22年）を期限としていることから、変革途中での調査である。

今後も継続的な実証研究が必要と考える。